

救いの言葉

2021.4.9

新しい職場に来て約1週間が経過した。本日、4月9日は、3月までお世話になっていた梁川高校の入学式である。そこで、ちょっと振り返ってみる。

3月下旬、異動が発表になり、校長室の荷物を整理していたところ、私が2年もの間、一番お世話になり信頼する生徒指導部長の先生が、校長室にやってきた。今までお世話になりました、という話なのだが、最後に言ってもらった一言で涙が出てきた。何だか救われたような気がした。

自分としては、令和元年11月に行った創立百周年記念式典が終わってからの約1年と5ヶ月の間、何もしていない、したいことはあるのだが躊躇してしまう自分がいた。ここには、達成感や成就感はない。

生徒指導部長の彼は、まさしく“全校生の担任”だった。人柄、経験など申し分なく、高校での経験値が足りない私は、事あるごとに彼に意見を求め、自分の判断基準がずれていないかと確認をしていた。いつでも彼は的確な考えを提供してくれた。

彼が梁川高校に大きく貢献した教員の一人であることは間違いない。だが、彼にとってはどうだったのだろうか。自分の得意分野を生かして、やりたいことができたかというところとは言いえない。これは、教員に限らず、どんな職場でもあり得ることである。私は、彼の気持ちを理解していたつもりである。私にも似たようなことがあった。それでも彼は全力で生徒のために学校のために働いてくれた。それが、生徒には伝わっていたのだと思う。

そんな彼も4月から新天地での活躍を始めている。彼は、今までも多くの生徒たちを救ってきた。私も救われた一人である。新しい学校でも、そのうちまた全校生の担任として多くの生徒に慕われる存在になるのだろう。それが彼が選んだ生きる道である。

一方、前任校で私の一言に救われたという教員がいた。その方とは、いろいろな話をしてきた。校長室で二人で泣いてしまうこともよくあった。彼女からは、「校長先生の思いはいつでも『熱く』『深く』『まっすぐ』です」という言葉をいただいた。

「深く」というのが一番うれしかった。「熱く」は、以前からよく言われてきた。「まっすぐ」というのは、ぶれないということか。この年になると、「深く」は最大の評価である。校長になると、なかなか自分の評価結果を知る機会はないが、やはり評価してほしいのである。だめなら、だめと言ってほしいのである。校長の話の後に、「今日のお話は、こうこうでしたね」などと、言ってもらえると楽になれるのだが。

私を救ってくれたお二人をはじめ、今までお世話になってきた方々の恩に報いるためにも、新天地にて全力で邁進するのが私の使命であり責務である。そして、できれば野田中学校でも、多くの生徒や先生方を救ってあげられればと思う。かつて私が救われたように。